

諸宮調から見る宋代の動補構造

—形式に於ける南北の相違—

渡 部 洋

元代は北方系の中国語（漢兒言語）が優勢となり可能補語の否定形式に於いては（動詞＋否定詞＋補語＋（目的語））の形式にほぼ統一されていたといわれている。それでは金宋時ほどのようであったであろうか？当時金と南宋に中国は二分され北方系中国語と南方系中国語が存在していた。そのような状況の中で動補構造の形式は南北の中国語に相違があったと考えられる。

今回その事を調べるために資料として「劉知遠諸宮調」（以後「劉知遠」と略称）と「董解元西廂記」（以後「董西廂」と略称）の兩諸宮調を使用した。「碧鷄漫志」卷二に諸宮調は北宋末に澤州の孔三傳によって創始されたとある。又先人の研究によれば、諸宮調は中国北方で盛んにおこなわれた語り物形式の歌曲であるらしく、その中には当時の北方の白話があんだんに使用されている。「劉知遠」は残本であるので量的な問題があるが、金宋時の姿をほぼそのままとめている。「董西廂」は後人の手がいり字體に注意する必要があるが、文の構造については問題がなく調査資料として十分堪えうるものであり、又完本なので量的な問題を解決することができる。

兩諸宮調を北方系の中国語が反映した資料とするならば、その比較対照する資料としては兩諸宮調とはほぼ同時代の「朱子語類」がある。「朱子語類」は福建を中心に活動する朱子と弟子達の問

答を記したものであり、その弟子達の多くは福建から江浙一帯を出身地とするので南方系の中国語が反映している資料と考えてはば間違いない。この「朱子語類」の動補構造については、古屋昭弘氏の研究論文（中国文学研究第11期）に詳しくある。その中に様々な動補構造の形式があったことが述べられてあり又表にして整理されてあるので兩諸宮調の動補構造と比較する際、主にこの研究論文を参考にした。

兩諸宮調に現れる動補構造の形式を調査すると方向補語を除く形式に於いて動詞と補語の間に目的語を置かない形式が置く形式よりも非常に多い。又兩諸宮調と「朱子語類」の動補構造の形式の数の割合を較べてみると動補の間に目的語を置く形式の数が兩諸宮調に於いて少ない。更に（動詞＋得＋目的語＋不＋補語）の形式が「朱子語類」の中で見られ兩諸宮調の中には見られない。これらのことから金宋時北方系の中国語に於いて動補の間に目的語を置く形式が減少する傾向は南方系の中国語よりも顕著であり、又そういった傾向の中で（動詞＋得＋目的語＋不＋補語）の形式はほとんど使用されなかったことが考えられる。但しその形式は北方系の中国語にもともと無かった可能性も考えられるので、その事については金宋時以前の白話資料を更に詳しく調べる必要がある。

今回大雑把ではあったが、動補構造の形式に於いて南北異なる点が存在したことがわかった。今後更に多くの資料を調査し金宋時前後の動補構造の形式をまとめ今回の調査結果と関連させて考えてみたいと思う。